

「間の山」考

—歌比丘尼の間の山節—

小林 幸夫

(一) 伊勢の歌比丘尼

近松の『傾城反魂香』に注解を加えた折口信夫の解説は、短いが、要点を尽くしていると思う。「相の山」節についてはつぎのように説明される。

○哀れ催す相の山　伊勢の山田から宇治へ向ふ古市を中心にした背伝ひの地形の、山田側にも、宇治側にも、相の山節を歌ふ女達が居った。もとは尼の姿であつたが、後には通常の娘姿の者が多くなつた。その主として歌ふ歌が相の山節と言はれた。此を略して相の山と言ふ。其とは趣きがやゝ違つて、世間を歩いた相の山は大抵男で、二人或は三人、組みになつて歌ひ歩いた。三人の場合は三味線、鼈、胡弓を合せる。相の山の本歌は行基の作つたものと伝えられて、

夕朝の鐘の声、寂滅為樂と響けども聞いて驚く人も無し。野辺より彼辺の友とては、血脈一つに数珠一聯。此が冥土の友となる

其他「花は散りても春は咲く。鳥は古巣へ帰れども行きて帰らぬ死出の旅」などいふ歌を連続して歌ふ。いかにも人を悲しませるやうな語であり、節であり、調べである。

「間の山」考

ここに云う「間の山」(相の山)とは、「俗ニ間ノ山ト云ハ山田宇治ノ領界ナルニヨリ云ナリ」(『勢陽五鈴遺響』)とあるように、伊勢の宇治(内宮)と山田(外宮)との境界の地である。この俗謡を歌つて渡世する歌比丘尼について、折口は繰りかえし述べている。

勸進比丘尼は目明きで、頭だけ僧形をし、衣は美しい女装をして、諸国を廻つては熊野権現への寄進を受けて歩いたものである。さうして、時に遊女と同じ為事をした。この歌比丘尼の唄が「相の山」といふものとなつて伝つてゐる。

花は散りても。春は咲く。鳥は古巣へ帰れども、行きて帰らぬ死出の道。夕べ朝の鐘の声、寂滅為樂と響けども。聞いて驚く人もなし。

かういふあはれ深いものを歌ひ廻つたのである。後には、その歌比丘尼は罪障消滅のため、自分の今までに犯した悪事を懺悔して歩いて、人の訓へとしようとしたが、その行ひの裏面には、随分矛盾した処を持つてゐたことは、前述の通りである。

近世の流行歌謡・間の山節は、熊野比丘尼によって、三味線、鼈、胡弓を伴奏として歌われていた。それゆゑ歌比丘尼とも云われたのである。さらにつづけて折口は間の山節の絵解きについて述べる。

相の山も此一種(※絵解き)で、鼈を持つて門付けをして歩いた。上方唄にも其文句は残つてゐるが、行基が作つて相の山で謡はせ

「間の山」考

たといふ伝へがある。此も男がするのが本態である。伊勢の相の山にお杉・お玉の二人がゐて、客の投げる銭を面で受けとめたといふのは、民間の門付けと共に却つて潰れた形なのである。相の山はまた伊勢の川崎音頭の源流でもあり、おなじく古い伊勢踊りもここに胚胎してゐる。相の山にも古くは必、絵解きがあつたに相違なく、それから比丘尼も出て、相の山ともなつたものであらう。だから、もと相の山が男であつたのも決るのである。

間の山節は、門付けして絵解きもされた、本来は男の芸能である、と折口は云う。それが比丘尼の手に渡つて、罪障懺悔の色を濃くしたという。絵解きされたことについては確証がない。本来、男の芸能であつたのが、比丘尼の手に移つた、ということも間の山節の、芸能としての本質にかかわると思う。ともあれ、こうして三つの著作をならべてみると、折口の勸進比丘尼論が立ちあがってくる。ここから稿を起こして、伊勢の歌比丘尼について論じてみたい。

(一) 熊野比丘尼の坂

宮川の渡しから中川原に出て、外宮に詣れば、そこから天の岩戸まで坂道がつづく。天の岩戸とは、高倉山の靈窟を云い、近世になつて「天の岩戸」と名づけられた。天照大神がお隠りになつた神代の物語にちなんどころよばれたのである。『諸国案内旅雀』（元禄十四年刊）は、この岩戸坂をたどりながら、ここにいる熊野比丘尼について記す。天の岩戸へは皆坂道也。天の岩屋と申は、其かみ天照大神の隠せ給ふ所也。（中略）岩屋の上の方に高天原とて有。大宮有。茶屋有。是よりれんずいと云浄土の山見ゆる。高天原より内宮にかゝるに十八町の坂道也。此坂に熊野比丘尼あまた有。大すえは、小すえは、市原が谷、みなつゞきたり。市原が谷は尤捷徑の所にて、松茸多く出る也。比丘尼が坂、きのね坂、三年坂、大黒谷、まり

けばなどゝて皆坂道也。

外宮から天の岩戸へ登る岩戸坂、そして高天原から内宮へとつづく十八町の坂道には、熊野比丘尼があまたいた。そこは外宮から内宮への参宮道にあたる。勸進のため熊野と伊勢を往来していた彼女らは、伊勢比丘尼ともよばれていた。『困爐間談』の記すところを示しておく。

満彦長官ノ高神坂路ヲ關キ給フマテハ、勸進比丘尼等岩戸坂ノ辺マテニ居タリシヲ、是時ヨリ制シテ一鳥井ノ新道ニ居ラシム、然シテ伊勢比丘尼ト云テ一派アルニ非レトモ、伊勢ノ比丘尼ノミ島或ハ小紋等ノ服ヲ被ルナリ、他國ノ比丘尼ニ曾テ許サヌ服ナリ、寛永十七年、外宮長官松木満彦が、岡本町に至る新道を造つて外宮一の鳥居に移らせるまで、勸進比丘尼や警女が、岩戸坂に住して参詣者に銭を乞うていた。古道も新道も、いずれ岡本町に至り、小田橋を渡ると妙見町、間の山へと道はつづく。

岩戸ヨリ帰路ハ井谷ニ下リ宮崎ニ出ル新古ノ道ハ変スレトモ共ニ岡本ニ至ルナリ今ノ裏坂ハ一欄宜満彦關ク処ナリ 又一名警女カ坂ト称ス往昔此処ニ盲女ノ詣客ニ乞丐シテ常ニ居タル処故ニ名クト云又伊勢比丘尼ト称スルモノ此地ニ娶リ居テ銭ヲ乞タリ満彦ノ時禁止シテ退シムト伝ヘリ又此坂ノ西ヲヘラリ坂ト称ス或云幣振坂ノ訛ナルヘシ（『勢陽五鈴遺響』（度会郡「岩戸裏坂」）

警女が坂や幣振坂の地名からすると、ここ岩戸裏坂では、参詣客を集めて祈禱のわざを行っていたとみえる。「七道者」のうちに数えられた遍歴の芸能者、「歩き巫女」は、「坂の者」と同じか、あるいはそこに起源を持つという指摘があることを思えば、岩戸坂の熊野比丘尼は、清水坂や奈良坂の非人や乞丐人に類する「坂の者」とも考えられる。

(二) 間の山のお杉・お玉

井原西鶴が、『西鶴織留』（巻四の三）「諸国の人を見しるは伊勢」に、伊勢の女芸人、お杉・お玉のすがたを記録している。

又間の山の乞食、むかしは遊女のごとく小袖の色をつくして、味噌こし提たるもおかし。其すがたには似ざりき。中にもおたま・おすぎとて、ふたりの美女あつて、身の色を作り、三味線を引ならし、「あさましや女のすゑ」と伊勢ぶしをうたひける。毎日の参詣、あだばれをして爰に立どまり、前なる真紅の網の目より、顔のうちをねらひすまして銭なげ付けるに、一度も当たたる人なし。自然と、顔をよける事を得たり。有時、江戸より参りたる人、百銭をなげつけしに、お玉が顔にあたり。額にすこしの疵を付てよしなし。

同じく『好色一代女』（巻六の二「旅泊の人許」）には、間の山節を「あさましや往来の人に名をながす」と歌わせている。「乞食」といい、「遊女」というが、かつての歌比丘尼も西鶴の頃になれば、剃髪の尼公ではなくなつて、豊かな髪を蓄えて、身すぎ世すぎのために、銭を乞い、色を売るのである。物乞いのような我が身を卑下するように、「あさましや」と歌うが、そこは豊かな伊勢である。「衣類は都嶋原大夫職の着捨し物にかはらず。」（『好色一代女』）と、参詣客からの勧進を受けて、衣裳からしてなかなか寛闊である。

すでに寛文延宝の頃から間の山に小屋を構えて、お杉お玉のような女芸人が、参詣客の袖を引いていた。

扱テ寛文延宝ノ頃、両間の山ニ小家ニテ三絃彈者ニ紗綾縮緬ノ類ヲ着シタリ。是ハ其頃ノ事ユエ上方江戸其余富家ノ参詣人持参シテ与ヘシナリ。其後御停止トナル云々。寛延ノ頃マデ尾上坂片原町山添ニ所々男編笠ヲ被リささらヲ摺リ子供ヲ踊ラセ銭ヲ乞フニ諷フ歌

ゆふべあしたの鐘の聲、諸行無常と響けども、聞いて驚く人もなし

「間の山」考

ナドト静ニ諷ヒシ故、其文句慥ニ聞ヘヌ。（『神都長嶺記』神宮文庫蔵）

ここにいう「両間の山」とは、宇治側と山田側からの呼称である。宇治側（内宮）は牛谷坂、山田側（外宮）は尾上坂。両宮の坂の間にあるところから、「間の山」といわれた。そして両方の坂に歌比丘尼がいて、参詣人を誘っていた。三味線を伴奏に彼女らは歌うが、もとは「ささら竹」であつたようである。浅野建二氏は、『山家鳥虫歌』の一首、「伊勢の山田の今切り竹は お杉お玉のささら竹」に解説をつけている。

「お伊勢参り」の盛行が生んだ歌。「今切り竹」は、今切ったばかりの竹。「お杉お玉」は、江戸時代、伊勢の外宮と内宮のあいだの間の山で、三味線・ササラ（簾）に合わせて俗謡「相の山節」を歌い、童子を踊らせて参詣人から銭を乞うた女芸人。「ささら竹」は、竹の先を細かに割った楽器。近松作「国性爺後日合戦」（享保二年一月初演）に「間の山お杉お玉が弾き謡ひ（中略）竹になりたや篠竹の、竹は簾に揉まるる」。類歌に「俚」奈良県高市郡伊勢踊音頭「伊勢の山田の今切る竹は、もとは尺八中は笛、末はおやまの筆の軸……」（愛知県地方田植唄にも小異）。

『好色旅日記』や『東海道中膝栗毛』の描く、女芸人の歌にあわせて子どもが踊る光景からは、「間の山」という芸能が、すでに見世物化しているところがうかがえる。しかし、簾を伴奏とするならば、「七乞食」とよばれた「簾説経」の徒に同じく、彼らもまた卑賤の芸能者であつた。お杉・お玉のような女芸人は、すでに有髪であつたが、勧進比丘尼は、頭だけは僧形であるが、歌をうたって銭を乞い、色をも売っていたのである。

（四）勧進比丘尼の間の山節

「間の山」考

西鶴とともに間の山節を用いて作劇したのは近松である。『傾城反魂香』の一章に間の山節が挿まれて、巧みに形象されている。嘆きに沈む遣り手の「みや」の耳に聞こえてくるのは、間の山節。

氣も沈み入る時しもあれ心細げな鼓弓の聲。あはれ催す相の山

我に涙を添へよとや。夕朝の。鐘の声寂滅。為樂と響けども。聞きて驚く人もなし。通りや。たゞの時さへ相の山聞けばあはれで涙がこぼれる。悲しめてならぬ胸ぶくらに。あた聞きともない通りや。通りやと言ひて涙を押し拭ふ。野辺よりあなたの。友とては血脈。一ツに数珠一連これが。冥途の友となる。(中略) まちとあはれな心を歌うて聞かせて下さなせ。あつと涙にする鼈鼓弓の弦も細き声。定めなき世に。捨てられて身の寂。滅が知らせたく文は。書けども便なし。ひとり。寝覚めの。友とては夢に。見た夜の面影か。是が寝覚めの友となる。

傍線をほどこしたのが間の山節である。往古、僧行基が両宮に参詣した時、世人に無常を示さんとして、唱歌数首を作つて、比丘尼に歌わせたのが初めという(『神都名勝誌』)。折口が注解のなかで引いていた「夕朝の。鐘の声寂滅。為樂と響けども。聞きて驚く人もなし」の歌がここに見えている。もちろん近松の創作の手が加わっているの

で、ここには『松の落葉』(巻第五)から「間の山念仏」を引いてみる。憂き事を思へばいとど胸の火の、消え易き身と云ひながら、輪廻の絆に繋がれて、南無阿弥陀仏くくく。夢の中なる夢の世を、悟らぬ事の果敢なきよ、南無阿弥陀仏くくく。野辺より彼方の伴とては、胎藏界の曼荼羅と、血脈一つに数珠一連、南無阿弥陀仏くくく。

野辺の送りが、「野辺より彼方の伴とては、胎藏界の曼荼羅と、血脈一つに数珠一連」と歌われる。死者の棺に入れられるのは、「胎藏界の曼荼羅」の図、「血脈一つ」、そして「数珠一連」。血脈とは、折口の説明にしたがえば、「其宗祖以来の教法の相伝せられたことを證

する系図」である。これらはそれぞれの宗祖に帰依した俗人にも与えられるという。冥途の旅の道連れに、これが棺に入れられる。

これと歌句を同じくする歌が、「刈萱道心歌念仏」として『はやり歌古今集』(元禄十二年刊)に収められている。このような野辺送りの歌が、勸進比丘尼によって唱えられていたのであれば、間の山節も歌念仏なのである。『声曲類纂』は「門説経」の注として『人倫訓蒙図彙』を引いて、

小弓引、伊勢会あそびの山より出る。此所の節一ト風あり。物もらひに種なきとはいへども、小弓・編木きんぎ摺すりはわきて下品の一属なりといへり。八画中に三人羽織を着し、一刀を帯し、編み笠をかぶり、家の前に立て、三味線・胡弓を引、ささらをするところを画けり。河東の節付にも用ひたり。

と述べる。ここから考えれば、門説経から歌念仏が生まれ、間の山節もまた生まれたのであろう。折口が、本来は男の芸能である、としたのも門説経の流れを念頭に置いての発言であらう。この勸進の芸が、比丘尼の手に渡ったと考えられる。後世(昭和十三年頃の著作)のものであるが、蘭田守理『秘本草紙』に「間の山節」が紹介されている。

行基の作と云ひ、弘法の作といふ、いつれにしても仏嘆のもの也。「我ニ涙をそへよとや。夕べあしたのかねの声。寂滅為樂とひ々けども。きいて驚く人もなし。のべよりあなたの友とてハ。血脈一つに数珠一れん。これが冥途の友となる」

これハ間の山ぶしといへどもお杉お玉の唄ひしものにあらず。勸進比丘尼の唄ひしもの也。近世ハ勸進比丘尼ハ宮川中川原ニありしも古き頃ハ間の山ニも居たるよし也。

近世ともなれば、宮川の渡し・中川原や間の山にいた勸進比丘尼が、この間の山節を歌っていたのである。お杉・お玉もその流れを汲む身であった。

(五) 内宮と外宮の境界

間の山は宇治（内宮）と山田（外宮）の境界の地である。『宇治山田市史』（下巻・「尾上町」）が、その地勢について説明しているのを見ておこう。

岡本町の東につづき、東は倭町並に岩淵町に、南は度会郡宮本村大字勢多村に、北は岩淵町に隣接して居る。元は妙見町と称したが、（中略）当町の南部並に倭町一帯の高丘を尾上山と称する。古来尾部、小部、御賢又は玄扈などに作って居る。尾部坂は一に間の山と呼ばれて居る。間の山とは内外両宮間の山と云ふ意で、倭町より桜木町に亘る長峰一帯の称であつたものが、今僅に此処に残されたものである。而して此の辺りの両側は墓地つづきであつたが、寛文年間に参宮道路に接する不浄を避けようとして、岩淵町一帯坊に移転せしめてから、三絃・胡弓などを弄して参宮客の投銭を乞ふお杉お玉の仮小屋もできた。明治維新後廃止せられたが、近年またその型ばかりを営むものが出来た。

岡本町から妙見町（現岩淵町）へとつづき、そこから南、倭町一帯の高地を尾上山と称して、葬送の墓地がひろがつていたのである。寛文九年、参宮の往来たる尾上坂の左右に墓地がひろがる不浄を嫌って、妙見山に移された（これを「一冢墓の墓地」という）。以来、参宮客を目当てに、女芸人たちがここに集まったという。この妙見町にも比丘尼のほかに梓巫女が住していたことは、『勢陽五鈴遺響』（度会郡「妙見町」）が記録している。

妙見世古本坊ノ東ニアリ民宇ナシ妙見堂ニイタル径ナリ 本坊ヨリ尾上坂ニ至ル東ニ小路アリ其路ハ今常明寺門前ニ至リ或ハ高源寺ノ門際ニ至ル径ナリ旧名御子カ坂ト云其所謂ハ古昔此地ニ梓御子ノ住シテアリシ地ナリ其故ハ此東ノ岡ハ各墓地ニシテ寛文中ニ

「間の山」考

他ニ移ス処ナリ其時マテ此ニ住シ特新葬ノ墓ニ詣ル処ノ婦女ニ梓ヲ聞カシムル処ナリ故ニ名ツク今ハ其居モ廃セリ

妙見町から尾上坂を登ると間の山に至る。ここ尾上坂には梓巫女がいて、墓詣をする人々のために、死者の霊を降ろしていたのである。

『勢陽五鈴遺響』はこれを「伊勢比丘尼」と称しているが、「山田比丘尼」ともよばれたようである。松本時彦は『正統神都百物語』（「勧進比丘尼」）の中で、岡本町と岩淵町（旧妙見町）にいた勧進比丘尼をそうよんでいる。

この山田比丘尼は岡本町と岩淵町松木とに親比丘尼が本陣を構へ、貧民の子女を貰ひ受けて之れを養育し、受持区域を定め、子比丘尼を引率して米麦の喜捨を乞ひ、毎年一度代表として熊野山へ参詣し、牛王を受け来る。之れを年籠の浄業と称していた。併しながら彼らが内容を着てば、矢張り私娼の臭気は免れ得ずである。

山田に住む伊勢比丘尼は、一年に一度、熊野に参詣して牛王札を貰い受けてきて、山田で配札して歩いたのだらう。勧進比丘尼のすがたがそこにとどめられている。しかしこれらの所業も、参詣客を目当てにした、乞食のごときわざであった。「私娼の臭気は免れ得ず」というのも、伊勢比丘尼の一面を伝えている。

(六) 妙見堂の袍衣納め

宇治と山田の境界の地である間の山は、度会氏にとって山宮神事を営む大切な場所であった。いわゆる度会氏の先祖祭祀の祭場なのだが、それについては別に論考を用意しているので、詳しくはそれにゆづって、その祭祀の一環といつてもいい、袍衣納めの儀礼についてだけ論じてみる。間の山の尾上坂に妙見堂がある。その堂の後ろに度会氏の袍衣を埋める習俗が、代々伝えられてきた。貞観元年（十一月十五日）、度会氏の遠祖大内人高主の女が、御賢川に沈んで溺死したという。亡

「間の山」考

骸をもとめて淵底を探ったところ、妙見菩薩の像を得たので、それを岡崎宮に祀った。以来、岡崎宮は妙見堂とよばれるようになった。そのいきさつを『神境紀談』（巻三「岡崎宮」）によって示す。

岡崎ノ宮ハ小田ノ橋ト尾部坂トノ中間ノ北ノ山ニアリ。今ニ妙見堂ト称スル是ナリ。貞観元年ニ度会氏ノ遠祖大内高主ノ女大物忌ノ子御賢川ニ没テ溺死ス。即時ニ妙見星ノ童形ノ像ヲ淵底ヨリ探得タリ。其ノ像ヲ岡崎ノ宮ニ居ヘ奉リテ氏人ノ繁昌ヲ祈リ給ヒシカハ、翌年ヨリ毎年ニ双子ヲ産テ三年ニ六子ヲ得タリト岩屋本縁ニ載セタリ。又妙見堂ノ後ロニ度会氏ノ氏人ノ胞衣ヲ埋蔵ノ所アリ。古記ニハ見エサレトモ古ヘヨリスル例トテ今尚此レヲ遺テ蔵スコトナリ。按スルニ彼ノ六子ノ胞衣ヲ此ニ蔵シテ故実トナリ将来レルニヤ。

度会氏がこの妙見堂に一門の繁栄を祈ってから、毎年、双生児の二男を得て、三年にして六男を授かった。『岩屋本縁』（神宮文庫蔵）という縁起によっているのだが、この説は信ずるに足らず、と諸書は退けている。たしかに度会氏の祖先伝承として検討する価値はあるものの、必ずしも信の置けるものではない。度会氏の祖先祭祀の由来を語る伝承と理解しておくのがよからう。しかし度会氏は、妙見堂の後ろに一族の胞衣を埋めて、先祖祭をしてきたことは事実である。土地の人もまたこの社に、小児の疾病や乳の願いを祈ってきたという（『伊勢参宮名所図会』）。度会氏の胞衣納めの儀式は、先祖祭祀を行って「氏人ノ繁昌ヲ祈」ることを目的としていた。妙見星を祀る山宮神事が、「田園五穀養蚕を祈る」（『勢陽雜記』）ことを目的としたのも、そのことを物語っている。

胞衣を葬地や墓に埋める習俗は、全国各地に伝えられているが、ここには室町將軍家の胞衣納め儀礼を記録した『蟻川親元記』（寛正六年条・一四六五）を示しておこう。

寛正六年八月朔日丙子、貴殿胞衣おさめの為に、御産所へ御参、

ハ御供、又三郎、助三郎、親元、白直垂ハ大帷、御産所にてめす、御胞衣洗る、時宜不_レ及_二存知_一、やがて御前より御出、御直垂、道のほどは被_レ持、御ゑな長唐櫃に入、ハ政所公人相副、御吉方異也、仍、しる谷を経て、歌の中山へ御出、ハ即御直垂於ニ山中_一被_レ著也、典葉頭参向、ハ狩衣、歌の中山にての在所ハ清水より栖岩寺へ通路より上、弓杖十四五杖ばかり歟、土を掘て、ハ河原者四五人、先壺をすゑて、御胞衣の桶、ハ白赤絹にて二重につゝむ、典葉是を取て、壺の中へ入てふたをす、即土をかけてうづみ申て上に松をハ長三尺ばかり栽らる、やがて御かへり、

七月に誕生した足利義尚の、八月一日の胞衣納めである。吉方を占つて、その山中に胞衣壺は埋められる。河原者がその上に土をかけて、松を植えるという。今ここで注目すべきは、この儀礼が「歌の中山」で行われることである。ここは鳥辺野の葬地も間近い山中であり、「中山」の名がある通り、「境界をなす峠」である。境界の地で行われるこの胞衣納めの儀礼は、將軍家の弥栄を念ずるものであろう。

妙見堂で営まれる山宮祭祀の一環、胞衣納めの儀式も、間の山の、境界としての性格を物語るものである。妙見堂は、一名「尾部坂之陵」とも称されたという。

御賢川と尾部坂の間の町は妙見町と云々。則山上に妙見堂有。貞観年中の草創と云ふ。是を尾部坂之陵と云ふよし。石窟本縁に見えたり。小田橋の巽方に当りたる尾部山中一峯に倭姫命御旧跡と巖上に石積宮有り（『勢陽雜記』）。

度会氏が先祖祭祀を営んだこの地は、倭姫命の御陵の伝承地、尾部山にほど近い。この葬送の地に、熊野比丘尼をはじめとする巫覡の徒がいて、魂降ろしをして冥界の消息を語っていたのである。

(七) 閻魔堂の鐘

『諸国案内旅雀』は妙見堂に神楽巫女のいたことを記録している。これも間の山周辺が葬地であることを思えば不思議はない。妙見堂は、陰陽道の「泰山府君」を祀るという（『勢陽雜記』^①）。陰陽道で「泰山府君」は、生命を司り、幽界を支配する神として祀られる。妙見堂は、冥官を神として祀っているのである。

妙見町の左の方に、妙見の宮とて有。この宮は御神楽子のおはする所也。妙見町を三町ばかりも過れば、閻魔堂有。此所よりはや、間の山の内也。間の山には、草苔にまみれたる石塔ども多し。此山の道端に、お杉お玉などいふ名取りの女、乞食草庵あり。四方上下一丈の庵有。前には紅の網をはりぬ。其内には三昧線を弾き、小唄を歌ふ。（『諸国案内旅雀』）

葬送の地において、祈禱のわざを行って、祓えするのが彼女らの仕事であった。そして間の山の入り口にあった閻魔堂は、ここが冥府への入り口であることの表徴である。そこに立つ石塔は、石塔婆か供養塔であろう。それならば間の山の歌比丘尼が歌う「間の山節」は、死者を弔う歌念仏となる。

憂き事を思へばいとど胸の火の、消え易き身と云ひながら、輪廻の絆に繋がれて、南無阿弥陀仏くくく 夢の中なる夢の世を、悟らぬ事の果敢なさよ、南無阿弥陀仏くくく、野辺より彼方の伴とては、胎蔵界の曼荼羅と、血脉一つに数珠一連、南無阿弥陀仏くくくく

歌念仏と鐘に送られて、死者は冥府に赴くのである。このことは京都の代表的な葬地、右京の蓮台野にある「千本閻魔堂」にひきくらべると理解しやすい。千本の地名は、日蔵（道賢）が冥府に赴いたとき、苦しみを受ける醍醐天皇が卒塔婆千本を立てるよう頼んだので、船岡

「間の山」考

山に千本の卒塔婆を立て、千本閻魔堂（引接寺）を建立したことによるという（『都名所図会』）。千本の卒塔婆に相当するのが、間の山の場合は石塔である。

蓮台野に葬送する者は、千本閻魔堂（引接寺）の前を過ぎるとき、必ず無常の鐘の一つ鳴るのを聞いたという。

案スルニ鐘一声スルハ無常ノ義也。統古今集哀傷部、天台座主源覚ノ和歌ニ、「一声ノ鐘ノ音コソ哀ナレイカナル人ノ終成覽」
（『山州名跡志』卷之七）。

もちろん鐘の声は、この世との別れを告げるものであった。間の山の閻魔堂に、鐘の音が響いたかは不明である。しかし、たとえ鐘はなかったとしても、

ゆふべあしたの鐘の声、諸行無常と響けども、聞いて驚く人もなし

と歌われる間の山節こそ、死者を送る無常の鐘となったのだろう。それはここ間の山にいた歌念仏の比丘尼によって歌われたのである。妙見堂を管理した常明寺が、尾上坂の南にあって、「建武二年正月一日一切父母法界万霊平等利益」と刻まれた曼荼羅石が建っていた。亡魂供養のために建立されたのである。ならば間の山節も、死者供養のために歌われたのは明らかである。ここにいた熊野比丘尼が、曼荼羅と血脉、数珠を友として旅立つ死者を送ったのである。

後にはこの閻魔堂も退けられ、近くにあった浄瑠璃小屋も古市の中地蔵にうつされたという（神宮文庫蔵『杉の落葉』）。参宮道者の袖を引く、お杉お玉の歌が、かつての歌比丘尼の跡を偲ばせるものとして残ったのである。

(注)

- (1) 「傾城反魂香」注釈（全集・十四卷）中央公論社・一九七六年
(2) 「日本文学啓蒙」（全集・十二卷）中央公論社・一九七六年

「間の山」考

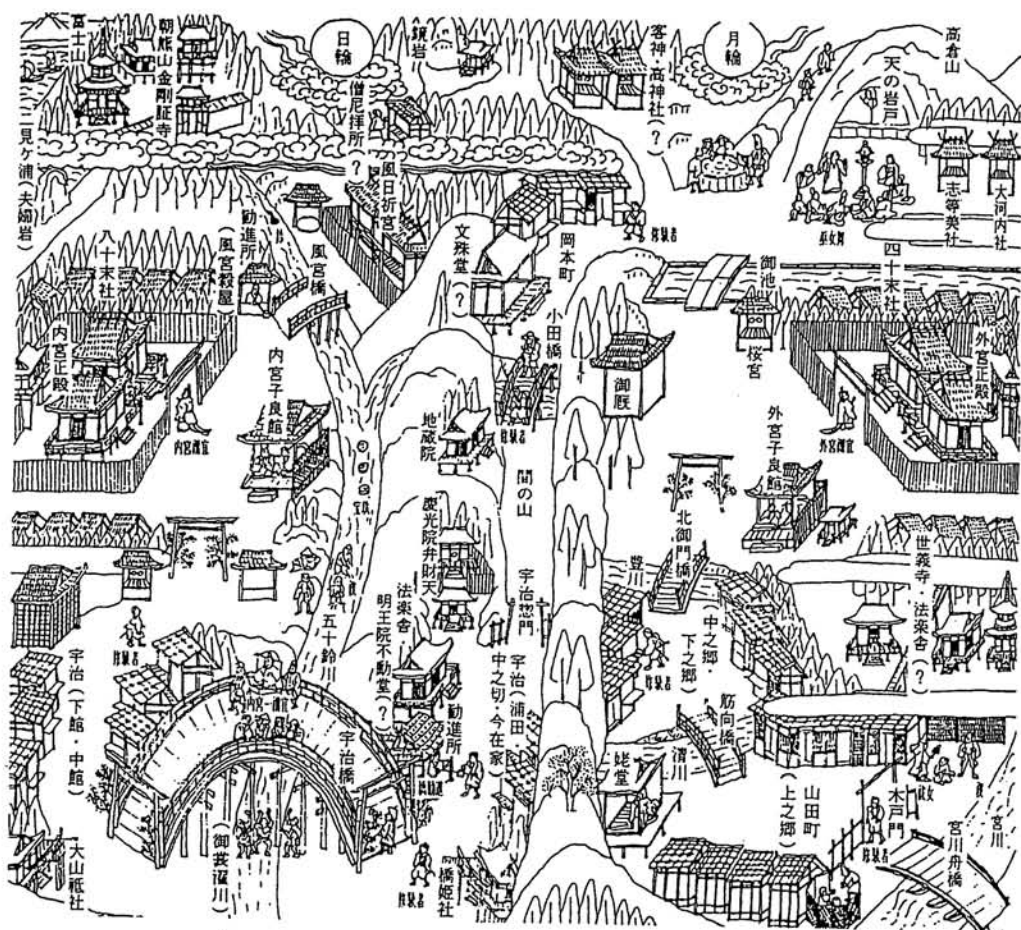
- (3) 「お伽草子の一考察」(全集・一卷) 中央公論社・一九七五年
- (4) 網野善彦「中世の旅人たち」(日本民俗文化体系6『定住と漂泊』) 小学館・一九八四年
- (5) 浅野建二校注『山家鳥虫歌』岩波文庫・一九八四年
- (6) 前掲書(1) 注釈
- (7) 藤田徳太郎『近代歌謡の研究』人文書院・一九三七年
- (8) 『秘本草紙』は藺田守理の著作。宇治山田の歴史・地理民俗・産業について述べる。
- (9) 柳田国男は「山宮考」の中で度会氏の氏神祭祀として山宮神事を論じている。柳田は「山宮」を、「凡俗の眼には見えない祖霊の隠れ宮」と云い、「かりそめの祭の庭」と説明している。(全集・一四卷) 筑摩書房・一九九〇
- (10) 『日本産育習俗資料集成』恩賜財団母子愛育会編・一九七五年
- (11) 横井清『的と胞衣』平凡社・一九八八年。黒田日出男「中山―中世の交通と境界地名―」(『境界の中世象徴の中世』所収) 東京大学出版会・一九八六年。補足しておけば、間の山の浦田坂に「中山」という丁があつて、中山延命大夫という山伏あがりの師職がいた(『神宮典略』三十六「浦田坂参道」)。「中山」とは、両宮の間であり、境界の意味をもっている。間の山中の地蔵、『伊勢参詣曼荼羅』に見える「地藏院」がその地である。また山伏と熊野比丘尼は「連れ」(夫婦)であることを思えば、浦田坂にも熊野比丘尼がいたと考えられる。
- (12) 度会氏の先祖祭祀が陰陽道とつながることは、おそらく伊勢流祓と絡んでくると思われる。これについては別の機会に考えたい。岡田莊司「私祈禱の成立―伊勢流祓の形成過程―」(『陰陽道叢書』第二卷) 名著出版・一九九三年
- (13) 勝田至『日本中世の墓と葬送』(吉川弘文館) 二〇〇六年
- (14) 神都で唯一鐘を撞くことを許されていたのは岩淵町の光明寺だ

けであった(『宇治山田市史』下巻「光明寺」)

- (15) 松木時彦『正統神都百物語』所収「曼陀羅石」(『柳田国男の本棚』) 古川書店・一九三二年

なお後ろに参考資料として『伊勢参詣曼荼羅』(神宮徴古館蔵)のトレース図と「伊勢参宮名所一覽」(安政三年)を掲げておく。前者は、西山克氏「参詣曼荼羅の実相」(上山春平編『シンポジウム 伊勢神宮』)から、後者は吉井貞俊氏『遊行伊勢本街道』(美学社・一九九三年)から引用した。西山氏にはほかに「胎金両部世界の旅人―伊勢参詣曼荼羅―」(『聖地の想像力―参詣曼荼羅を読む』所収)の論がある。この二つの論考は、本稿をまとめるにあたって、たいへん参考になった。

(本学教授)



『伊勢参詣曼荼羅』(神宮徴古館蔵)

